

博士論文執筆経験談

平成28年3月修了生

元所属：生活・技術系教育講座 現所属：琉球大学教育学部 生活科学教育専修 講師 **土屋 善和**

博士論文題目：家庭科における「学力」としての批判的思考力の検討

1. 学位論文提出に至るまでの流れ

私は、5年かけて学位論文提出に至ることができた。まずは、5年間という長い時間をかけてどのように論文提出に至ることができたかを述べていきたい。

1年目、2年目は多くの課題が与えられ、それをこなす日々であった。そうした状況下では、現在自分の研究がどこに向かっているのかが明確ではなく、とにかく指導教員や他の先生方からの指導に沿って研究を進めていけば、いずれ博士論文がまとまっていく、そのような甘い考えもあり、自分の研究にも関わらず主体的に進めているとは言えなかった。その結果、2年目3月の中間発表では、2年間で自分がしてきたことは語れたが、博士論文がどの段階まで進んでいるのか、どのようにまとめていくかといった、「博士論文」としての発表には至らなかった。

したがって3年目は、まず自分の研究を見つめ直すことから始めた。テーマを「批判的思考」に絞って批判的思考に関わる国内外の文献を読みあさり、研究題目も変更した。実際には3年目が学位論文提出の時期であるため、題目の変更は大きな決断でもあった。しかし、3年目が転機となり、自分がどこを目指せばいいのか、そのためには何が必要なかがより鮮明となり、ここからは迷いなく研究を進めることができた。そして、4年目の5月に2本目の査読付き論文の掲載が決定したため、9月に見極め11月に予備審査を行った。見極め及び予備審査では、審査の先生方から多くのご指導・ご助言をいただき、その際に博士論文としては、ボリュームが足りないことが指摘された。11月の時点では、提出が困難であったため、もう1年かけてじっくり練り上げることを決意した。

そして5年目は琉球大学に勤務をしながらも、長期休暇（GWや夏休み）を使ってデータの分析や論文の修正を行い、指導をいただくために沖縄と横浜を何度も往復し論文を書き進めた。その結果11月の予備審査を経て12月の提出に至り、1月には公開審査会を行い、3月に無事修了することができたのであった。

2. 学位論文の提出に向けて

博士論文としてまとめていくためには、1つ1つの論文、または研究を1本の軸で貫いて構想することが

重要である。どれだけ良い論文が数本あったとしても、「博士論文」としてまとめなければ意味がない。ストーリー性や章ごとのつながりが特に重要である。自分が執筆してきた論文をすべて含めようとするともまりが無くなる場合もあるため、時には今まで執筆してきた論文を捨てる勇気も必要となる。

そして、学位論文を提出するためには、それなりの覚悟と心構えも必要である。

まず、「自分と向き合う」ことから逃げないこと。研究とは、自分と向き合う活動であると考えている。自分と向き合うことはかなりつらい時もある。恩師の受け売りであるが「答えは常に自分の中にある」ため、自分と向き合うことから逃げてはいつまでも答えは見いだせない。自分の中の答えが見つければ、おのずと自分がどこに進んでいけばよいかも明確になる。

「絶対に完成させる」という強い意志も不可欠である。何があっても博士論文を完成させたいと想えば、意識や行動がそちらに向かっていく。そして、「納得できる論文にする」という妥協しない想いもなくてはならない。自分が現在置かれている状況をもう一度思い返してほしい。おそらく、多くの人に支えられながら、時には迷惑をかけながら、自分の追究したいことを追究しているはずである。このような状況で研究ができて以上、自分が納得できる論文に仕上げなければ（とりあえず提出できればよいというだけでは）後悔するし、不完全燃焼で終わってしまう。自分が何のために博士課程に進んできたのか、初心に立ち返り研究と向き合う必要があり、納得できる論文にするためには妥協してはいけない。

3. 学位論文の提出に至って思うこと

学部、修士、博士とおおよそ10年間に及ぶ研究の集大成として博士論文をまとめられたことを、今では大変嬉しく、誇りに思う。学位論文をまとめることは辛くそして険しく、孤独な作業であった。しかし論文をまとめたという経験、そして論文が提出できたという事実は、私の財産となっている。そして、10年間という長い時間をかけ私を0から指導してくださった指導教員の堀内かおる先生、経済的にも精神的にも支援してくれた家族には感謝が尽きない。今まで私を支えてくれた人達に応えるためにも、今後も立ち止まることなく、日々精進していきたい。